

Rotary



白河西ロータリークラブ

SHIRAKAWA WEST ROTARY CLUB



ロータリーは機会の扉を開く

2020-21年度国際ロータリーテーマ

2020～2021年度クラブ目標

『35年目の再構築 ロータリーの源流へ』

会長 吉野敬之
幹事 堀田一彦

創立 1986年



第1659回例会

令和3年3月11日 (18:30～19:30)

○ソング

- 四つのテスト

○スマイルBOX

- 吉野敬之会長 (卓話いただいた皆様、有難うございました。10年経っても決して薄れる事の無い震災の記憶をお聞きし、災害の大きさを改めて痛感すると共に絆の大切さを再認識いたしました。皆様今後共是非よろしくお願い致します。)
- 堀田一彦幹事 (卓話をされた会員の皆様、ありがとうございます。)
- 金田昇会員 (10年の節目となりました。新しい10年が穏やかでありますよう。)
- 齋藤孝弘会員 (ホームミーティングで成井さんお世話になりました。楽しく、おいしく、良い時間を共有させていただきました。ありがとうございます。また成井班長がいいです！笑!!)
- 関谷亮一会員 (3月11日あれから10年長い様で短かった月日であります。忘れがたい事でした。今後は持続可能な社会を私達は目指す事が大切であると思います。本日卓話をさせていただきました。)
- 居川孝男会員 (東日本大震災から早10年、思いはつのるばかりです。熊澤支社長、ご栄転おめでとうございます。今後ともお付き合い宜しくお願いします。)
- 成井正之会員 (熊澤会員、栄転おめでとうございます。四年間の短いおつき合いでしたが野球愛好会で数々の思い出をつくることができました。赴任先でも元気にご活躍を祈念しております。今夜は先約があり、送別会に出席できません。又、逢いましょう。)
- 鈴木孝幸会員 (東日本大震災から10年、しかしまだ復興半ば、という気持ちです。被災者の方々の鎮魂の意を込め、スマイル致します。)
- 富永章会員 (たくさん会員の皆様の卓話ありがとうございます。一日も早い復興を祈って居ります。)
- 青木大会員 (卓話の機会を頂きありがとうございます。いつもと変わらない毎日に感謝します。体が動く限りゴルフにスキーに旅行に行きます。日曜日に1バーディー取りました。ありがとうございます。)
- 永野文雄会員 (3・11の犠牲者への追悼の気持ちで。)

▶第1659回例会出席状況 (R3年3月11日)

Ⓐ 出席免除を受けていない正会員数	47名
Ⓑ 出席免除の適用正会員数	14名
Ⓓ 全正会員数	61名
Ⓒ ①の出席者数	31名
Ⓔ ①のメイクアップ者数	1名
Ⓕ ②の出席者数	9名
Ⓖ = ③ + ④ + ⑤ (メイクアップ補填後の出席会員数)	41名
Ⓗ = ⑥ - (⑦ - ⑧)	56
Ⓘ = ⑥ / ⑨ × 100 (例会出席率)	73.21%

▶例会日: 第1・第3木曜日 (12:30) その他の木曜日 (18:30～19:30)

▶例会場: 白河市新白河駅前 東京第一ホテル新白河

▶事務局: 〒961-0957 福島県白河市道場小路96-5 (白河商工会議所内) ☎23-3101 FAX22-1300

本日のプログラム

■会長の時間

吉野敬之会長



皆様、こんばんは。本日もお忙しい中、例会にご出席いただきましてありがとうございます。今日は3月11日ということで、皆様ご存じのように10年前、東日本大震災が発生した日でございます。震災で犠牲となりました方々のご冥福をお祈りして、昼間皆様既にされているかもしれませんが、例会に先立ちまして黙祷を捧げたいと思いますので、恐縮ですが皆様ご起立お願いいたします。黙祷。ありがとうございます。どうぞ、ご着席ください。本日の2時46分、わたくしは事務所でサイレンの音を聞きながら黙祷を捧げさせていただいておりました。その間、10年前の事をいろいろと様々な事が頭をよぎりました。皆さんも今、もしくは昼間、黙祷を捧げてる間、その当時の事とかその後の事とかですね、いろいろと頭を駆け巡ったのではないかとというふうに思います。10年目の節目となりますこの3月11日が、当西クラブの例会日にあたるということは私は勝手に運命的な事だなというふう感じておりました、本日の例会は急遽でございますが「鎮魂と復興」というテーマのもとで、当時の皆様方の思いや、その後の生活や仕事の復興を通して感じていること、思いというものを会員の皆様と共有したいと思ひまして、急遽一人5分ほどの短い時間でございますが8名ほどの方が卓話に協力していただけたということだったので、皆様方からお話をいただくというふうな形のプログラムにさせていただきました。東日本大震災発生後に、絆というワードをよく目にしたり耳にしたかと思ひます。確かに、災害の中で私は生まれて初めて家族の絆、友達の絆、様々な絆の大切さを強く実感したように思っております。現在は、コロナという災害が世界中を襲っているわけではございますが、震災後に感じた絆の大切さというものをメンバーの皆様からの卓話等を通して、この機会に再認識できたらいいなというふうに考えております。また、更にその話を共感を出来るだけ多くの皆様方と一緒にしたいという思いがありまして、多少無理を言いまして100パーセントを目指す例会というふうな形で、できるだけのご出席をお願いしたいという次第でございます。いろいろ大変な時代にはなっ



ておりますが、やはり人と人の絆、その大切さを再認識しながら生活していくこと、それが一番かなと思っておりますので、今日発表される方、また今日発表されない方々も、今日はそういった思いを一緒に出来たらいいなというふうに考えておりますので、よろしく願いいたします。

■幹事報告

堀田一彦幹事

- 国際ロータリー第2530地区 ガバナー 石黒秀司、地区大会実行委員長 太田宏：国際ロータリー第2530地区2020-2021年度オンライン地区大会 地区大会特別研修セミナーご登録のお願い
- 国際ロータリー第2530地区 ガバナー 石黒秀司、地区幹事 関谷信：会長・幹事会議ZOOM資料
- 2020-21年度ガバナー事務所：永年在籍・長寿会員 表彰負担金について
- 小島開陸：白河西ロータリークラブ【オンライン講演のご提案】NPO法人アクセプト・インターナショナル
- 財団法人比国育英会バギオ基金 会長 多田宏、総務担当副会長 齊藤実、幹事 平塚隆志：「バギオだより」配布のお願い
- 社団法人 ロータリーの友事務所：2021-22年度版（新年度版）ロータリー手帳お買い上げのお願い
- 国際ロータリー日本事務局 クラブ・地区支援室：MY ROTARYリニューアルに伴う修正中の問題について

■本日のプログラム

会員卓話

「震災から10年、鎮魂と復興」

○プログラム委員会

齋藤孝弘委員長



皆さん、こんばんは。本日は3月11日ということで、先程吉野会長からもありましたけど、この10年と鎮魂ということで、皆さんから数多くの方から卓話をいただくことになりました。ちょっと時間がまだ、本当は45分からということだったの私からちょっとだけ。当時は、私は車で東京に向かってまして、その間に佐野に降りる予定だったんですね。佐野に降りたらアウトレットの前なんですが歩道橋がありまして、いきなり揺れて当時何が起きたかわかんなくて、ラジオから地震があったと知れたんだなと思ったんですけど、逆だったというのがその時の思い出です。本当に皆さん大変な思いをしたと思いますけど、今日もその時の思いをお話したいと思ひます。是非、最後までよろしく願いいたします。それではまず、関谷さんのほうからこの10年ということでお話したいと思ひます。よろしく願いいたします。

○関谷亮一会員



皆さん、こんばんは。今、齋藤さんから年の順だということで、私トップで話させていただくんですが、先程、5時ちょっと過ぎですか。日本テレビの番組をちょっと見てたら、あの3月11日の津波が押し寄せたあの映像を30分くらい流していたんですね。まさに10年前のあのすさまじい情景がなんか私の頭の中に蘇ったのですが、先程黙祷をしましたが、今日は2回目の黙祷で2時46分にも黙祷をさせていただきました。この地震が東日本を襲った。この出来事は、戦後最大の被害というか災いではないかなとそんなふうに思います。そのほかにも、戦前には関東大震災。その後、戦後でも神戸の地震がありました。そのほか、九州にも熊本地震とかいろいろありましたが、東日本大震災はまさに戦後最大の出来事、そんなふうに考えております。未だに4万人に渡る方々が避難されてるということを知りますと、何か心の痛む思いでございます。マグニチュード9～9.1というこの揺れ方というのは、私らもほとんど経験したことありませんでしたが、とにかくこの地震が襲ったということは10年間過ぎたといっても、10年過ぎたまだ10年なのかというそんな考えがいたします。これで我が本県には、今度はその原発の災害がそこにダブルパンチで皆さんご存じのとおりなんです。安全神話が一夜にして崩れたというのが現状だと思います。それによって福島県のあらゆる産業が非常に痛手を受けてございます。私も農業やっておりますから、このそれらの水素爆発が起きたこの影響で本県の米を例に取りますと、福島県の米は新潟に次いで、会津、中通り、浜通りというふうに、大変美味しい米が取れてるわけですが、しかし今までは栃木、茨城に比べて、今日齋藤さんもいらっしゃいますが、栃木、茨城に比べて60キロ当たり1,500円位は本県の米が高かったんです。ところが、この問題が起きてから1,500～1,600円が安くなってしまったと。そして、スーパーには本県の米があまり袋詰めになって消費者の目にはあまり目に当たらないと。言い換えれば、裏通りの米になってしまったと。いいか悪いかは別としてそんな状況でした。そんなこともありまして、この農業ばかりではありませんが、水産業についても同じ事が言われます。やっとな今、この漁業も試験操業からだんだん本操業に入ろうとする時に、今備蓄している水ですね。放射能を冷やす水が毎日増えていると。それをどうするかというのが、政府にとっても非常に大きな問題だと思うんです。海上に放出すればそれでいいと言うんですが、確かにレベル的にはそうでもないと思うんです。しかし、この風評というのは非常に恐ろしいことで、また福島県の魚を買ってもらえない状態になってしまうのではないかと、私も農業者としても漁業者の方々のことを非常に案じてます。そんな事が考えながら、この震災まだ10年しかし10年経ってしまった。更には、あと10年20年とこの問題が尾を引くのではないかな、そんなふうに思います。私たちは常にやはり心に据え付けておくことは、やっぱり持続可能な社会をどう

作るかと。それはやっぱり福島県だったら、電気は福島県の電気は福島県だけで使えるような電気。そういう地産地消ですね。そういうものを更に発展していただけたらいいのかな、そんなふうに思います。やはり、この災害を機にそれぞれの人達の価値観、コロナの問題も含めてですが、それぞれの人達の価値観が変わる時代になってきたのかな。そういう意味では、先程申し上げましたように私達は持続可能な社会をどういうふうにして作ったらうまくいくのかなということをやったり肝に銘じながら、あらゆるところで皆で考えてみるのが必要な、そんなふうに思います。与えられた時間は5分という事でしたが若干長くなりました、2分程長くなったようですが、お許しをください。ありがとうございました。

○青木大会員



皆さん、こんばんは。震災の時の話をということだったので、私は葬祭業をしていますが葬祭業に携わった時のお話をさせていただきたいと思います。今日、何を喋ろうかなとこう何日か前からずっと考えてたんですけど、今日先程関谷さんからもあったようにテレビ等を見ると、やっぱりあの当時の思いを思い出すので、なかなかいい心境にはならないんですけど。葬祭業ということで、人が亡くなった事に携わる仕事です。震災当時は、私は東京にいて震災を受けたんですけど、その後いろんなことをして次の日には帰ってこれました。東京にいたので自分の所がどういうふうになっているか、全然電話は連絡は取れずにいました。ただ、ショートメールは非常に早く繋がるということで、ショートメールで連絡を取り合ってたので、なんとなくの状況は掴めてて家族の安全だとか、会社の中での被害は多少でもないですけどありましたけど、それほど大きなことにはなってなく何とか続けられるような状況だと確認できてたので、自分たちが帰ることだけを考えていました。帰ってきてからテレビでは福島県白河市のなだれですね。多分、一番先に津波の報道もありましたけど、あの時に堀田君とか関わって12人くらいが亡くなられたと思うんですが、その報道が物凄く頻繁にしていたので、本当にいろんな人から電話をいただいて、それでも限定的な所ですよというような話をしていました。その後、やっぱり津波の被害が大きいので、いろいろな所から協力に行くよと連絡を貰ったりしたんですね。私たちの入っている組合が二つありまして、一つは葬儀を行う全日本葬祭業協同組合という組合と、もう一つは全日本霊柩自動車組合というご遺体を運ぶほうの組合がありまして、運ぶほうの組合はトラック協会の下部組織みたいな形の組合です。阪神の時も、私はたまたま京都にいたのでお手伝いをする機会がありまして、どちらかというご遺体を運ぶというほうが大きな震災の時には関わるんですけど、その霊柩組合のほうから何とか福島県にも手伝いに来てほしいというような要請をしていました。ただ、福島県には誰も行く人はいません。何しろ放射能が危ないのというよう

な形で、誰も来る事がなかったんですね。何のためにその組合に入ってるのか。お互いが協力しあっていくようなために入って、協力の要請も出てないような所に協力に行く。そして、協力の要請を出している所に協力しないそんな組合には、終わった後は脱退したんですね。福島県としてはトラック協会に入れば事足りるので、霊柩組合からは全員抜けますということで、福島県は抜きました。それだけちょっと扱いが酷かったというか、対応が酷いでした。それとうって変わって、葬祭業協同組合というのは葬儀をするほうなので、多分どちらも霊柩の仕事もしてる人も多いので、協力に行くよと言って一番最初に来てくれたのがやっぱり葬儀の組合のほうで、京都のほうからわざわざ来てくれました。来てもらっても白河市、それほど大きな被害というのは多くの人が亡くなってるということではなかったの、何とか大変な所に行って協力してもらいたいという思いのもと、私は原町市のほうには別な組合、互助会系の組合が福島市の「たまのや」さんを中心に入るというふうになったので、私たちは相馬市のほうにお手伝いに行くようになりました。それもやっぱり、行き始めたのは3月20日くらいからだだったと思うんですが、ある程度落ち着いてはいたんですね。ただ、行ってみるとやっぱり今まで見たことないような惨状で、工場がアルプス電気さんの工場跡地になりますね。アルプス電気があって撤退した跡地で、工場の外側だけ残っていて、中身はがらんどろという所に沢山の棺が並んで家族が探しにきたりだとか、身元がまだまだわからない人たちも沢山いたというのがその当時の現状です。ただ、わかった人から順番に出てくんですけど、それを相馬市の火葬場は動かないので、二本松であったりだとか福島市であったりだとか郡山市であったりだとか、そういった所にお連れしてって茶毘に付すというような仕事をさせてもらいました。最初のうちは、それこそ白河から相馬まで毎日朝の3時頃出て、向こうの朝8時に出発するのに合わせたりだとか、帰ってくると12時くらいになってたりだとかいう中でやってたら、相馬市のほうが気を使っていた文化センターの楽屋を私たちのために用意してくれて、ここで寝泊まりしていただいていたんですよという形で場所を提供してもらったりだとか。たまたまそうやって相馬のほうに行く機会があったので、やっぱり一日中いるとどうしても気が滅入ったりだとかするので、海沿いのほうどんな状況か見てみようかと思ったら、テレビと同じような状況のもと、テレビでは瓦礫があるだけなんですけど現地では匂いもすごいんですね。そういったのを映像だけもう一回10年度に見ても思い出したりとかして、少しこうあんまりいい気がしないんですけど、そういったことを忘れないようにしなくちゃなのを、震災の後大体落ち着いた4月中くらいからは自分とこの仕事をしながら、亡くなった人だとか、もっと生きたかった思いのある人のためにも、一生懸命生きなくちゃみたいな思いがあったんですが、どうしても内に内に入っていきと暗くなって行って、周りも電気の制限であったりだとかいろいろな事があって、テレビのCMも

あのACしか流れてなかったじゃないですか。ああいったのとかいろんな事がこうあると、なんかどんどん暗くなって行って自分がちょっと鬱っぽく多分なってたんじゃないのかなと思うんですね、当時の頃は。ただ、半年くらいした頃に、吉野さんとかは結構早い段階からゴルフにもう行かれてましたよね。多分、6月くらいからもうほとんどゴルフしてる人がいない中、ゴルフに坂口先輩と行ってたと思うんですね。僕はそういった姿を見て、そんなまだゴルフなんてやってる場合じゃなくて、世のため人のために働かなくちゃいけないんじゃないか、自粛しなくちゃいけないんじゃないのかなっていう思いもあったんですけど、そうやっていくとどんどん暗くなって行って、どんどんやる気がなくなっていくとか。やっぱり、どこかで元気になる人から元気になっていなくちゃ駄目なんだというような、やっぱりそういう先輩の姿を見て、僕ももっとゴルフをやって元気になるろうと。元気になる人からなろう。そう思った時から、非常にいろんなことが前向きに考えられるようになってきて、毎回、災害だとかいろんな事がある度に、いろいろな人たちが被害を受けると思うんですが、自分たちができることはやっぱり元気になって、その自分の考えてる中で出来る協力をすればいいと思うんですね。無償の協力もあれば有償の協力もあるし、お金を使えるのであれば使えばいいし、使えないのであれば無理して使う必要もなくて、その中でやっぱり元気に生きていくことが非常に大切だと思うし、気負ってまでやることでもないというふうなことを改めて感じましたし、これからもそういった中で頑張っていきたいなというふうに思っております。

○横田俊郎会員



皆さん、こんばんは。今日は卓話ということで、東日本大震災の総括という銀行で平成24年3月に出した書類なんですけども、資料としてお持ちしましたのでもしご興味ある方はご覧いただければと思います。当日、わたくしは本店の人事部というところに所属しております、ちょうど人事異動が発令になった日でございまして、我々としても一大イベントが終わったので飲み会にでも行こうかと思ってた2時46分に地震があって、人事部は6階にあったんですけれども、向かいに「タケヤ旅館」という非常に歴史ある旅館があったんですが、そこが崩れて土塀から土煙が6階までわーっと上がってきてですね、これは大変だなというような思いをいたしました。その直後ですかね、とりあえずかみさんが子供と仙台に里帰りみたいな感じで行ったもんですから、とりあえず電話して繋がって無事だということでもまず安心したんですけど、その後みんなで駐車場に避難しまして、携帯でテレビを見たら仙台空港が津波でもう飛行機が埋まるような映像を見た時はですね、うちのかみさんもやばいかなと思ったんですけど、何とか無事だったので本当に良かったなという思い出がございます。その時、頭取が福島大学で

講演をやっていたということで、福島大学から本店まで通常車で20分くらいなんですけど、なんか2時間くらいかかったということで、本店の人たちは駐車場で雪が舞う中、どうしようかという時に頭取がぱっと表れてですね、みんな大丈夫かというふうに言って声かけてくれた時には、なんかこの人すごい人なのかなというふうに思ったという印象がございます。その日は、福島市内の自宅に徒歩で帰って一人だったので何とか、停電だったと思うんですけれども何とか一夜過ぎて、また次の日から仕事したという記憶がございます。東邦銀行、最大29の支店が休業ということでお休みになったんですけれども、一番苦労されたのは通帳とかハンコがないけどお金が欲しいという方が沢山窓口いらっしまったということですね。その人の通帳に今残高幾らあるのかというのが、データのわかんない状況だったらしくて、それでも一応10万円までは払おうと決めて何にも無しで払ったと。どうしても10万円じゃ足りなくてという方もいらっしまったようなんですけれど、そこは支店長が判断して何にも無しで払ったと。例え、残高本当になかったとしても取りあえず信用したといいますか、この事態だからしょうがないということで払ったということでございました。最終的には、4月くらいには全部こう残高より払った人もちゃんと戻してもらったというんですか、すべて事なきを得たということで福島県の皆さんの県民性ですね。真面目だなというところを、頭取も非常に感謝していたということでございます。それから、私はその年の8月に転勤で仙台に行ってしまうと、それから実はこの白河に来るまでずっと仙台で仕事をしていましたので、この10年の間、大半は実は仙台にいたという非常に若干情けないという部分があります。ですから、私が10年何をしてきたんだろうというふうに思うと非常に複雑な思いがしております。白河では2年くらいですけれども、やはり一番被害を受けたこの福島県の復興のためにですね、まだまだ私は役に立ってないと思っておりますので、白河にまだまだいれればと思っておりますけど、今後も福島復興のためにお役に立てるよう仕事のほう頑張っていきたいと思っております。わたくしのほうからは以上でございます。ありがとうございました。

○山田 顕一郎 会員



皆様、こんばんは。大変ご無沙汰しております。短い時間ですので、私なりのお話をさせていただきたいと思うんですが、先週、ゲストでお見えになった青年会議所の方達がいたと思うんですが、私も10年前青年会議所というところに所属しております、ロータリーと一緒に米沢さんとか深谷ノースさんとかコザさんと同じような形で、白河青年会議所というのは三重県の桑名青年会議所と埼玉県の行田市の行田青年会議所と姉妹締結ということで仲良くさせていただいておったんですけれど、新幹線が復旧したのが大体震災が起きて50日くらい経った後

だったんですが、本当に復旧してすぐ桑名青年会議所のその当時のトップの理事長と専務と、ナンバー1とナンバー2の人がすぐ名古屋から新幹線に乗って来てくれて、「天王楼」という中華料理屋の2階で一緒にご飯食べて、桑名の名物の安永餅という餅があるんですが、それをスーツケース2ついっぱい持って、取りあえず食べてくれということで。そのお見えになるということを知った時に、まだ4月の終わりくらいで原発もどうなるかという状態でしたし、なんて言うんですかね、ろくなおもてなしができない感じでおったんですけれど。実際、来てもらって話をすると、白河の人間の中に西日本の比較的普通に生活をしている方々が来てくれて一緒に話をすると、今振り返ってみるとそういう大変な状況をちょっと忘れられたりであったりとか、なんていうか私が想像していた以上に私の心の中で凄く安心感とかそういうのありまして、桑名のその二人も多分来るのに葛藤があったはずですし、白河は大変といっても被災地といっても軽いほうだと思っておりますが、そういう場所に顔を出すのがためられる部分というのがあったと思うんですが、それを押し切ってこう来てくれたわけですが。逆の立場に立った時に、何かできないかというところから側が助けられるような立場になった時には、この経験を通じた結論からいうと、どんどんその常識の範囲内で本当顔を出すだけでもやるべきだなと思いましたが、これからもそういう機会があった時には私はどんどんそういう事をしていきたいなというふうに思いました。その桑名青年会議所、行田青年会議所、その他に全然普段は全く親交のなかった千葉県千葉市の千葉青年会議所が、当時、那須甲子自然の家で結構避難されている方がいて、その方たちが靴が欲しいと。着の身着のまま来てたので靴が欲しいということで、上の組織を通じてオーダーしたところ、千葉JCさんが靴を持ってきてくれるということで。あれは5月の半ばだったと思うんですけれど。200足くらい靴を持って、ただ届けに来てくれたということなので。何が言いたいかというと、今10年経って忘れてないよという気持ちを伝えなきゃと、ちょっと2~3日前に急に思い立って、成井パスト会長のご息子が今、白河青年会議所のトップにいるので、ちょっとお願いして今現役の会員の方からそういう気持ちをちょっと伝えてほしいということをお願いして、快く引き受けていただいて、桑名青年会議所さん、行田青年会議所さん、そして千葉青年会議所さんにそのお礼の気持ちを伝えていただいて、別に今日という日にちにこだわることはないと思うんですが、そういう気持ちを伝えることができて良かったと思うのと、あともう一つ、今回今コロナ禍の中でこういう震災の経験があったので、何か自分で出来ないかなと思って首都圏の友達とか、そういう人にたまたま鳥インフルエンザの時に買った大量のマスクが会社にあったものですから、そのマスクを要りませんかとか。社員が殺菌水を作れる機械を持っていたので、欲しければ送りますよというような形で自分なりに一生懸命やったつもりでおったんですけれど、青木会員も言っていたけどそういう大変な事でしたけど、胸が痛くなるよう

な話がまた最近よく聞いたりどうしても耳に入ってくるんですが、なんて言うんですかね、それから得たことを前向きにやっていくことが大切のかなと今思っている次第です。以上で、終わらせていただきます。ありがとうございました。

○中目公英会員



皆さん、こんばんは。10年目の3.11の今日の例会に話をしろというお話をいただきました。実は、全国組織の神主さんの集まりが、今日、双葉の浪江で慰霊祭をいたしておりまして、地元でうちの息子が設営で朝からずっと行っているものですから、今日は一日中何だかんだすべて私がやらなきゃいけないので、例会も欠席かなと思っていて返事のファックスは卓話できませんってしたはずですし、なんで僕のかなと思いつつドキドキして、やっぱり例会に遅れてきて齋藤委員長にハラハラドキドキさせてしまった次第であります。そんなわけで、何にも考えていないのですが、朝から皆さん方もテレビで見て多少沢山お腹いっぱいだと思っておられるでしょうから、震災の話は少しだけさせてもらって、今お手元に資料のほうを配らせていただきましたから、そちらのほうを6分のうちの半分で話をさせてもらえればと思っております。ちょうど東日本大震災が起こった3月11日というのは金曜日だったんです。南湖神社にとっては本当に珍しいんですけど、その次の日の土曜日に神前の挙式をしたというお申し込みが入っていたものですから、朝から参道を掃除をしてご本殿をお掃除をして、ご本殿の中で挙式ができるような設備を整えて、大体掃除が終わったと思った頃にご本殿の中にいた時にぐらぐらぐらっときて、参道を見たらお参りの方がいなかったので安心はしていたのですが、まあ鳥居は落っこるは、灯笼は倒れるはというのを一番いい席の観覧席からご本殿からずっと全部見て、あーこれでもう終わったと思ったようなそういうふうな2時46分でした。これではもう次の日の結婚式はできないなと思って、新郎の人は白河市内の人だったので、新婦の方は東京からの人だったので、間に入ったのは「すずや」さんだったものですから、「すずや」さんに電話をしたのですが繋がらず、新郎の家は近いから仕方がないって新郎の家まで自転車を飛ばして行って、神社の参道はこういう状況でなんだかんだで明日結婚式できないから何とか許してもらいたいということと言わないといけないと思って、携帯を持って電話も何も繋がらなかったものですから、3時4時5時まで新郎さんの家に行って新婦さんの家はわからないから「すずや」さんまで自転車で飛ばして「すずや」さんに行って、こういう状況なので多分新婦さんの親族の方々、新幹線で白河に来れないだろうから多分結婚式やらないと思ってるんだろうけれども、取りあえず正式に請け負っている以上、できないということを正式に言わないといけないと思って「すずや」さんまで行って、また神社に戻ってきて、国道289号線で下水管が1メートル以上飛び

出しているのを見ながら、いろいろ困っている人がいっぱいいる中、そういうふうなことをしてその日の夕方まで過ごしたことを今でも鮮明に覚えています。被害状況は、一般の住宅でいうところの鳥居の門柱みたいなものが倒れ、石灯笼はほとんどすべて倒れ、鳥居も倒れ、社務所は真壁なものですから漆喰の白壁はほとんど全部落ち、ご社殿は何とか立ったままで崩れなかったんですけども、基礎のほうを見たら基礎石のほうは全部ずれて地崩れを起きている、これはもう神社としての機能はもう当分駄目だなと思って、それからずっと毎日片付けの日々でした。原発で水素爆発があった時に逃げるとい話があるから、家族で話をしうちの家族、母ちゃんとかなんかにお前たち逃げたいんだったらどうぞ避難してくれと。俺は南湖神社背負って東京まで行って南湖神社、東京で始めましたってことはできないから、俺はどうなったって白河に骨をうずめるしかないの、僕の覚悟は決まってるんだけど、家族は安心な所へ行ってもいいと言ったら、誰も行かない、もうどうなったって皆で白河に最後までいましょうという話をし、それからなんとなく気分は落ち着いたんですけど、片付けの日々を送ったというふうな形です。大体、全部直すのに8年間かかって、去年一昨年終わって去年一年間休んで今年から鎮座100年の記念事業をしようと思って前向きになったところ、この前の2月13日の地震でほとんど石造りがみんな崩れてしまいましたから、また10年前を同じくゼロからもう一回やり直さないといけない。そういうふうな思っているところでもあります。あと、細かい話は大体似たりよったりで、南湖神社支店があるわけでもありませんので、本当に氏子さんとか何だかんだが神社どうなってるか見に来て片付け手伝ってくれるかなと、実は内心想っていたんですけど誰も来ず、これは一から十まで自分で出来ることは全部自分でやらないと駄目だなというふうな覚悟を決め、石屋さんをはじめ業者さんに電話しても優先順位がありますから、自分とこに来るまでの間は何か我慢するしかないなと、そういうふうな思った3.11の前後の2週間くらいでした。あと後半戦は、皆さん方のお手元にお渡しをした資料の話をさせてもらいたいと思っております。南湖神社と渋沢栄一の関係性の話はもう既に皆さん方ご承知ですからそこは省略をしまして、渋沢栄一の出生地である埼玉県立歴史と民族博物館のほうで、そこにありますように3月20日から5月16日まで企画展、「青天を衝け」NHKの大河ドラマの企画展をやることになりました。このチラシがそのチラシですけども、この上のほうにある白い桜、これは南湖神社の所蔵する渋沢栄一から奉納してもらった日本画のデザインがこのチラシに散りばめられていて、裏面のほうにはこの二つの日本画が一番メイン中のメイン、この孔雀は丸山応挙ですからこれはしようがないとして、それに次ぐメインの展示物として埼玉県立博物館のほうに展示される企画展があります。このチラシには割引券が付いていますから、是非皆さん方も東京のほうに行く機会があったら、大宮のほうで一回下車してもらってこちらのほ

う見てもらえれば大変ありがたいというふうに思っていますので、この企画展に参加してもらえれば。それだけで終わるのかなと思つたらば、埼玉県の小学校、中学校の総合学習でこの企画展に来てもらいたいというふうなことで、ジュニアガイドというのをこちらのほうの小さなパンフレットを埼玉県のほうで作って、これは十万単位で作って各学校にまで配布しようというクラスのチラシができてきたんです。このチラシを開いてもらうと文化の欄、渋沢栄一というのは実は文化的な面でも貢献したんだというふうなところの説明文は、南湖神社のほうで所蔵している絵がこんなにでかく取り上げられているというふうなことで、子供向けのガイドブックですから全部振り仮名ふってありますし、本当に渋沢栄一がどんなに立派な方なんだというのが簡単に大人でもわかるように書いてありますから、こちらのほうをご覧になって今日お帰りになったらお子さんお孫さんにも見せてやっていただければいいんじゃないかなと思っております。白河市の方々も、そんなにこの絵が立派だ、価値があると誰も気付いていなかったものですから、来年多分白河で企画展が行われるんじゃないかとは思いますが、とりあえずは埼玉のほうで開かれますから、是非大宮に行く機会がある方はご覧になっていただければと思います。これで簡単な話させてもらいました。ありがとうございました。

○車田裕介会員



皆さん、こんばんは。ご依頼いただきましたので、簡単にお話させていただければなと思います。今日、私も今現場にちょっとつめてるんですけど、現場のほうで2時46分に全員、作業員100人くらい集まって黙祷をさせていただきました。その後、その事業所の所長さんが仰ったのは、僕たちの仕事は社会にすごく必要とされている仕事だし、それを誇りに思ってこれからも仕事をしていきましょうということでお話しいただいて、士気がだいぶ上がったなというような思いで今日過ごしたのを覚えています。10年前の当日は、私は会社の2階で用務をしてまして、ちょっと眠かったのどうとうとしていたらすごく揺れて、そのあと訳がわからないうちにパソコンが落ちてきて怪我をするというような形になったんですけど。それから考えると、そこから10年くらい今日で丸10年なんですね。10年経って考えてみると、その時は思い返してみると2011年の今日の日というのは、私その時、駅前の白河市立図書館で作業を担当してまして、完成してまだ引き渡す前の時期で、うちの自宅は場所的に良かったのか何も被害がなかったの、家族も大丈夫なことだったので、一番最初に行ったのが自分の現場を見に行きました。どうなってるのかなということで見に行きましたら、窓ガラスが1枚割れてただけだったんですかね。中も多少はいろんなことあったと思いますけど、建物の場合損傷があったのは角の大きなガラスが1枚だけ割れただけだということで、その時私がちょっと

思ったのは造り的なものは私は専門家じゃないのでわかりませんが、きちんと綿密に考えて組み立てられたものだちゃんと持つんだということがすごく思いました。それは建物だけではなく会社だったりとか家族だったりというのも一緒なのかなと。一つ一つが役割を各々の人が果たすことによって、一つ一つのは細かたり小さかたりしても全体としてもつというふうな、そういったものができるのかなとすごく私はあの時感じました。それが私が震災の時に当初に感じた事で、その時私は何故かわかんないですけど、福島県の電気工事組合の青年部の会長を仰せつかってまして、5月くらいだったと思うんですが全国の会長が一斉に東京に集まるという会がありましてそこに行った時に、事業計画みたいなものをその前に毎年作って出さなきゃいけなかったんですけど、急遽決まったので事務局に任せておいたんですが、その当日に自分が何を読むのか見たら、震災後に読む事業計画が福島県、親睦と懇親を深めると書いてあって、他の県の人は福島大丈夫かとか、東北の6県の人もいたんですけど皆さん壇上に上がってみんなから頑張れと言われてる中でそんなことになって、兵庫の会長さんにひどく怒られたことを覚えています。というのは、兵庫の方はその前に阪神大震災を経験されていて、その時に言われたことは今でも忘れないんですけど、「車田君、そんなじゃ福島復興でけへんで。」と言われて、その発表するのを何でか知らないんですけど福島県は最後にしてくれて言って、この時間の間に車田君考えてくださいってということで、必死になって考えて発表したことを覚えています。取り留めもない話になりましたけど、この10年間ということ思い返してみると、災害の復興ということでは仕事柄そういった仕事柄ですので、いろいろな所でお役に立てた部分もあるのかと思いますけど、これからもそういった災害に強いようなものに少しでも寄与できるように仕事もそうですし、こういった活動も一生懸命頑張っていきたいと思いました。以上です。

○熊澤直紀会員



皆様、お疲れ様です。急遽、欠席の大住さんのピンチヒッターということで、あんまり準備できてないのと時間も押してると思いますので、なるべく手短かに私の思うところをお話させていただきたいと思うんですけど。震災ということで10年ということで、10年前は別の所におりましたので直接の被災経験はないんですけども、この福島でご縁ができたのはちょうど4年前にこの白河に着任したということなんですけど。やはり、最初福島と聞いて皆さんどんな思いで生活されてるのかなという不安があったんですけども、いざ来て皆様に接しますと、本当に忍耐強く我慢強く、しかも前向きに本当に取り組んでいらっしゃるということで、非常に感銘を受けた次第でございまして。また、新参者の私なんか皆様の本当に温かい人柄とその情の深さで受け入れていただきまし

て、本当に居心地が良かったなと感じた次第でございます。また、くしくもちょうど2月13日に地震がありまして、本当に10年前の余震ということで驚いて、まだ続いているのかという感じですけども、そこで仕事に絡めてという10年ほど前の規模ではないんですけど、当社だけでも2万5千件という事故件数を受けておまして、今も全国から100人を集めていろいろ事故対応、鑑定も含めて当たっております。なるべく早くお支払いできるように会社あげて取り組んでいるんですが、本当にここにきて私の自分の仕事の使命感を本当に感じる事ができるという経験をしたものですから、引き続きお客様とか皆様のお役に立てるように頑張っていきたいというふうに思っております。この場を借りてわたくし事ではございますが、4月1日付で転勤、移動が決まりました。行先は、千葉県の銚子市でございます。この例会もですね、今日とあと来週が私、最終ということになります。本当に短い期間しかおられませんけども、来週は私と共に後任も引き連れてまいりますので、二人一緒に参加をさせていただいて改めてゆっくりご挨拶をさせていただきたいというふうに思います。

○永野文雄会員



どうも、改めてこんばんは。早くから言われてたので原稿を作ってきました。テーマは、「東日本大震災と白河市の除染作業」。2011年、平成23年3月11日、午後2時46分、地震発生。それにより、津波が発生。東京電力福島第一原子力発電所の1号機が3月12日に、3号機が14日に水素爆発を発生しました。結果として、全体で死者・行方不明者、2万人を出して、今も16万人が避難生活を強いられております。そして、東日本全域に放射性物質が飛散し汚染が広がりました。特に、福島県内は被害が大きく除染する必要に迫られました。当初の除染作業は、震災の復旧工事をやりながら市内の公共施設、学校、公園、保育所などで入札により市内の建設業者が担当しました。当時は、まだ仮置き場が決まっていなかったので、学校などの汚染土は校庭の空き地などに穴を掘って袋に入れて保管されてました。白河市内では、大信地区、白河地区、表郷地区、東地区と仮置き場が指定されて、それに私たちが搬入し、現在そこから双葉地区の中間貯蔵施設へ輸送されております。郡山市、福島市などで仮置き場のない箇所は、住宅地内の空き地に今も置いてあるようです。その後、個人住宅、事業所、山林も除染する必要となり、市長の考えで除染作業をする団体の必要性を白河商工会議所へ要望し、組合の設立に動き出しました。組合設立の条件をクリアするために、白河地区の建設業者が発起人の中心になり一つにまとまり白河市除染支援事業協同組合を起ち上げました。設立の認可は福島県知事より、平成24年12月17日に地震発生から1年9か月でいただきました。組合事務所は建設業協会白河支部内において、商工会議所からもベテラン職員1名を派遣していただきました。設立総会時は延べ70社でスタートし、最終

的には87社に増加してました。建設業者、設備工事業者、電気工事業者、造園業者等々です。一番初めの委託作業は、線量の最も高い大信日仙地区からでした。その後、次々と空間放射線量が0.23マイクロシーベルト以上の場所、市内全域を行い、平成29年7月31日の組合解散までに足掛け5年で、合計金額247億円の除染作業をさせていただきました。事務所も新白河地区の広い場所へ移転いたしました。組合設立の条件は、2社以上で常時300名以上の作業員、30か所以上のチーム編成が可能なことと難しい条件がクリアされました。当時、白河建設工業協同組合とって生コンクリートを製造販売している組合を運営してまして、理事長は兼子恵治さんでした。聡君のお父さんです。除染組合の申請者代表として兼子恵治氏が進めておりましたが、その頃兼子氏は「株式会社兼子組」の代表権を兼子聡氏に変更して代表権のないために否認され、ちょうどわたくしが白河市建設親和会の会長をしていて、「永野土木建設株式会社」の社長をしていたために、組合の代表者は永野文雄で知事の認可が下りました。組合運営の実務に入ってから兼子恵治氏に戻りました。その後の、解散登記の時には兼子恵治氏が亡くなってしまったので、また永野文雄名での解散登記となりました。郡山市や西郷村は組合が一つになれず、除染作業の入札金額が1億円を超える物件は大手ゼネコンが元受け業者として落札し、地元の建設業者はその下請け業者として作業しました。白河市は、私達地元建設業者が元受けで担当し、作業の地区、金額などを考慮して組合内で配分できたので、それなりに利益を得ることができました。当組合の解散時には、余剰金の一部を白河市と白河商工会議所へ寄付させていただきました。しかし、5年近く除染作業をしている現場の責任者は技術者が多く、もとの本格的な工事への憧れ、思い入れが大きくありました。経営者としての会社側は、利益面から大きく貢献していただいたと思っております。ありがとうございます。(合掌)ご清聴ありがとうございました。

○吉野敬之会長

今日は、皆様の中のいろいろな思いを知ることができて、確かに5分では語りつくせないなど。また、どこかでこういうお話を伺えるような機会があったら嬉しいなど感じた例会でございました。以上で、例会を閉会いたします。ありがとうございました。